

子ども達に大人気のアンパンマンの作者、やなせたかしさんが亡くなって10月で一年が過ぎました。94歳の天寿を全うされ、活動は多岐にわたりました。その活動を二回にわたり振り返ってみたいと思います。

いまでこそ、やなせさんというとすぐにアンパンマンという感じですが40代~50代以上の方には「てのひらを太陽に」の歌のイメージが強いのではないのでしょうか。

ぼくらはみんな 生きている
生きているから 歌うんだ
ぼくらはみんな 生きている
生きているから 悲しいんだ

てのひらを太陽に
すかしてみれば
まっかに流れる ぼくの血潮
ミミズだって オケラだって
アメンボだって
みんな みんな生きているんだ

ぼくらはみんな 生きている
生きているから 笑うんだ
ぼくらはみんな 生きている
生きているから うれしいんだ

てのひらを太陽に
すかしてみれば
まっかに流れる ぼくの血潮
スズメだって イナゴだって
カゲロウだって
みんな みんな生きているん

やなせさんによると、歌詞の「生きているから悲しいんだ」が「生きているからうれしいんだ」よりも先にきているのは死んでしまえば悲しいという感情もない。悲しみがあるからはじめてうれしさがある。人生は悲喜こもごもだが、喜悲こもごもとは言わない。影がなければ光はない。だから、「悲しいんだ」が先に出てくるのだということ。

漫画家として世間に認められず鬱々としていた42歳のとき、子どもの頃やっていた遊びを思い出して懐中電灯を手のひらに当て、血の色がびっくりするほど赤く透けて見え、心に元気がなくても血は元気なんだと自分自身に励まされ、この歌は自分自身を励ます気持ちから生まれた歌でした。

(「やなせたかし 明日をひらくことば」より)



何気なく口ずさむ歌に深い思いがあるのですね。